

---

# マジキチなオレが世界を救うワケが無い

うおると

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジキチなオレが世界を救うワケが無い

### 【Zコード】

Z7308Z

### 【作者名】 つむると

### 【あらすじ】

全ては神の御心のままに　　と、『オレ』は世界を滅ぼした。  
比喩でも冗談でも無くマジで。100億人くらいの人類は死滅し、  
その他の動物や植物、ついでに魔物も滅んだ。  
さあ、それじゃあお待ちかねの報酬を　　と思つたら神様が衝撃  
的な一言を！？

オレ：○i  
オレ：m i s u

オレ：おい

オレ：紀伊店のか

オレ：詐欺とかマジ死ねよ。

マジキチな『オレ』が送る、愉快でも、痛快でもない、残念な妄想異世界召喚ダークファンタジー。

\*この小説は主に作者の自己満足で出来ています。更新は不定期です。『異世界』『最強』『チート』嫌いな方は遠慮ください。

## プロローグ・煉獄召喚 世界の破滅

田の前の全てが燃える、焼ける、灼ける。

人も、家も、地面も、空気も、何もかもが燃える。

先程までここは都市だった。この国で一番と言い切れるほどの大都市。最先端の防衛機構を備え、最大数の軍隊と『勇者』が守る都市。

「なに、ここのザマだ……どう訳するのさ、勇者様？」

「っく！」

オレの田の前にいる男は歯噛みしながらこっちを睨んでくる。でも、ただそれだけ。初撃で足を一本、追撃で両腕を炭化させたから立ち上がれるはずもない。

案の定、勇者は灼熱の地面に這い蹲りながら叫ぶ。

普通、そこまでヤラれたらショック死するか気絶しそうなものだけどね。

「よくも……よくも旨をつけ！」

「悲しいけど、これ戦争なのよね……なーんて」

「貴様　ぐつづう……！」

少しからかってみると面白いくらい激昂する。でも空氣すらかなりの熱量なのに本当によく吼えるわ。

勇者の正体は結局わからなかつたけど……案外サイボーグだったりしてね。

「『めん』めん。でも本当のことでしょう？ 戦争だし殺すのは当然。一般市民とか街もまとめてなのは……なんて言つてたかな、確かゴ

「掃除がどうのって」

「ツ！ ライティングブリツツー！」

「おつと」

オレは一応避けようとしたが、流石に光の速さで迫る雷撃は避けられないよ。直撃した。

かなり痛いし手足が痺れる。心臓も 数秒止まつたけど問題無いみたいだ。

「う、あー……」の程度？

「バケモノめ……」

バケモノ扱いか。一応人間だし憤慨する場面かな？

「やつべ。今の一言のまゝがさつきの電撃より痛かつたかもしけん」「はあ……はあ……」

勇者様は息が上がつてらつしゃる様子。そんなにやつてると喉が先に死ぬぞー。

「はあ……何故だ！？」

「え？」

まだ元気なのか……驚いた。

「何故、帝国に『』する！ 戦争は終わるはずだつた！ 帝国は無茶な侵略を止め、世界は仮初といえど平和を手に入れるはずだつた」

「平和ねえ……」

背中がむずむずしてきた。なにこれ、説得したいの？

「貴様さえ……貴様さえ現れなければ…」

「あのわ……ぶつちやけでいい？」

「何を　」

いいよね、言つちやつて。クライマックスだし。こつ、悪役が真相をポシリポシリと語つてナ、ナンダッテーみたいな展開。

「そんなん関係無いんだわ。帝国とか平和とかさ」

「なつ……」

「帝国がさ、一番効率よかつたんだわ」

あ、勇者の頭の上に？マークが一杯浮いてる。そりやそつか。

「オレの目的つてのはさ、世界を滅ぼすことだよ」

「…………」

な、なんだつてー！ つて言われたかつたなあ……残念。

「その手段として帝国の尖兵としてへーーいら働いてたワケですよ。いや、これで終りだと思つと胸がすくよ」

「どういう　」

「オレの能力は『異世界召喚』。読んで字の如く、異なる世界を召喚することができる」

オレは大袈裟な動作で腕を広げながら辺りを見回す。田に入るのは見慣れた灼熱地獄。

「ただまあこの能力。ご存知の通り、範囲は広くて十数km……頑張れば数十kmいくる程度なんだよ。普通なら十分だが、世界を

つてか人類を滅ぼすにはちょっと足りない。足りなさずがね」

あれ、勇者様の反応が無い……あ、でも目が動いてるし生きているか。オッケー頑張れ勇者様！

「そ・こ・で！ とりあえずある程度この『煉獄』 ああ、この異世界のことね。を馴染ませておいて放置しておくれてわけですよ。後は」

言葉を切ってパチンと指を鳴らす。

予定では拳大の炎がボッと燃え上がるはずだつたけど、タイミング良くどこか遠くで爆音が轟きキノコ雲が上がる。  
やべー。今のオレ、すつじい悪役みたいに見えてない？  
カメラがこの熱に耐えれば良い絵が取れたのになー。

「同時に『呪喚』してやるつと。呪喚する前の弊害といえба多少気温が上がる程度だしね、まず一番広大な土地を持つ帝国を終わらせる。後は帝国の侵略に合わせて俺も他国に移動。侵略と異世界の設置をするつていう地味ーなことやつてたわけだ。これが帝国についた理由かな。……何か質問ある？」

オレがさらつと説明してやると、勇者は口をパクパクさせるだけで声が出ない。

終りかなーと勝手に思つていると、ぼそぼそと何かつぶやく。

「……ぜ……を……す？」

聞こえません。もっと大きな声でよろしくお願いします。

「なぜ……せか……を……ぼす？」

埒があかん。近づいてやるかな。

オレはまだ若干痺れが残る足を動かして勇者に近づく。大体5mくらいの位置でちゃんと聞き取れた。

「何故……世界を……滅ぼす?」

あー、そこ気になりますか。そういうや言つてなかつたね。それはな……

「全では神の御心のままに…… つてヤツかな」

「そうか…………おおおおおおおおおおおおおおおお……」

つて嘘!? ちょっと……足動くはず無いっしょ。勇者補正か!?  
チートか!?

「エクスカリバー！」

あ、エクスカリバーって実物の剣じゃなくて魔法なんですね。え、もしかしてやばい?

かなり接近してたのが災いして勇者の手に生まれた光の剣 エクスカリバーが急速に胸へと迫る。

お、おー? 死ぬんじゃねコレ。なんたつて伝説の聖剣エクスカリバーですしね。

「はあっ……はあっ……はあっ……！」

オレの体をかなりの勢いで剣が貫通する。骨も内蔵も見事に真つ二つ。いてえ。

「貴様は……生まれてくるべきでは……無かつた」「ぐは……が、……」「じふつ」

ちよつと待つてくれ勇者様。  
の？ オーバーキルなの！？  
なんでまた剣に力込めるの？  
斬る

「...」  
「...」

ちょっと待つてええええええええええええええええ！――！

勇者の剣は心臓の辺りからまつすぐに急降下。

た……ちくしょうめ。

「やつたよ。セリーヌ、ヴァイン。」

誰よそれ。クソ、油断した。最後にやられるラスボスの気持ちがよく分かつた。

緑色に染めてや  
るよ。

体内に『逆行世界』を召喚!  
瞬時に傷を修復して体勢を立て直す。

「な……！？」

痛い。とんでもなく痛い。傷は治つたはずなのにまだ斬られてる  
感じが残ってる。

オレはもう足に力を籠めることのできない勇者の襟首を掴んで持ち上げる。

その顔には火傷と幾つかの傷があるが、元々の美形が損なわれる  
ことは無い。

だが、表情は完全に絶望しきっている。光の剣は既に消えている  
し、本当に奥の手だつたのだろう。

あーあ。良い気味だよ。自然と顔がにやけてくる。

「ねえねえ、今どんな気持ち？」

「あ……」

「勇者様程度で、このオレを殺せると思ったの？ バカなの？ 死  
ぬのー？」

本当に悪役の気持ちが分かる。今のオレなら自然に高笑いが出来  
る。

「まあ 死ぬのはお前だけじゃないからさ」

皆一緒に怖くないくてね。

「待……て……」

「じゃあな。来世は学生でもやつて暮らせよ。残念な勇者様」

「あ、あ、ああああああああああああああああああああ！」

召喚。世界を『煉獄』が覆い尽くす。その僅か数分後 世界は  
滅びた。

## プロローグ・仕事の出来ない神様

ああ、ここの長つたるこ廊下を歩くのもこれで最後かー。長かつたな。

オレは延々と続く真っ白な廊下を進む。

この先に在るのはこの世界を創った神がいる場所。クライアントであるそいつに会うために、まっすぐに歩いていく。まあ一本道なんですけどね。

ようやくついた。ここまで来るために一瞬だった気も、途方も無い時間が立つた気もする。

「よお神様。ミッションコンパートですよつと」

オレは何の遠慮もなく真っ白の扉を押し開く。

真っ白の壁に真っ白の床。机も椅子も調度品もばこの部屋の主も白だ。

「……随分と、仕事が早いね」

白い髪に白い瞳の少女。白い肌に白いローブつと……相変わらず白白白。

自分は潔白ですよアピールしたいのかもしねん。

まあ、ちつこくて可愛いからいいか。ジャステイスですよ、ジャステイス！

「仕事は正確で、楽に、早くやるのが一番だ。設置には手間が必要だつたが、邪魔する存在なんてそういう無かったしちょろいもんさ」

「君が目覚めてから約43年 人類の、いや、生物の歴史を白紙に戻すのには少々短すぎるね」

そんなに経つてたのか。そういうや時間なんて全く気にして無かつたしな。

「そう、早過ぎる。私は　君がどんなに頑張つても数百年、ないし千年はかかるとさえ思つていた」

「見ぐびるなつてことさ。人間やるときややるつてね」

火事場の馬鹿力。背水の陣。上げればキリないんじゃねーの？

「そして、私が君に支払う対価　報酬についてだが」

待つてました！　オレはよつやくこの最低最悪の

「結論から言おつ  
無理だ」

……は？

「君が先刻倒した勇者。アレは私が用意した者だ」

「つ……どういう自作自演だよ」

あーやばい、キレそつ。何で！？　お前はオレに世界を滅ぼした  
いつて言つたよな？

その対価に報酬　　オレの望みを叶えてくれるつて……。

「当初のシナリオではこうだ。君は私の依頼を受けて世界の破滅を進めて行くが、人類には『勇者』という守護者がいた。君は勇者の圧倒的な力に負けるが諦めず、各国の戦争を助長する形で破滅を推し進めてゆく。さらに、勇者は人間ゆえ代替わりする。寿命はもはや存在しない君が、千年後に最終決戦を仕掛けても対応出来ていた

はずだ。最終的に君は勇者に勝利するが、致命傷まではいかずとも重傷くらいにはなるはずだた。」

「後はボロ雑巾のオレと数の減った人間つーか生物を掃除して完了つてわけか」

神様は無表情で「クリと頷く。可愛らしい動作だが、今のオレには苛立ちしか湧いてこない。

「オレの能力は知つてたよな？　何での程度で勝てるなんて思つたよ」

「そもそも、君が異常すぎるのだ。あの『煉獄』を世界規模で召喚、維持することが出来るなんて」

「おい 寝言言つてんじやねえぞクソガキ」

「無理だ。耐えられない。何コイツ？　ふざけ過ぎだろ。

神様は依然として無表情のまま椅子から下りてオレと対峙する。

「いつごり無理だつて気づいた」

「……君が最初の勇者と接触した時からだ」

「ああ、適当に転がして周りの奴らだけ殺つたんだつけな。それで？」

「？」

「それで、とは……？」

「何で神様は無理だつて気づいた時に言わなかつたんだ？」

「勇者も代替わりすることに強くなるから、それでなんとか出来る」と

「だとしたら！　勇者には手を出すなつて指示が必要だよな。何でそれを……？」

「私は……外界に直接干渉は出来ないから

呆れた。「コイツ本当に神様か？　神様って言つたらもつといつ何

でも出来て、何でも知ってる、って感じのだと思つてたんだがな。あ、もしかして「コレってオレのミス？ こんななんちゃつて神様の言う事を信用するから」こうなるんですよーってヤツですか。

「はあ……代案よいか」

神様の頭の上に、マークが浮かぶ。ハッ……オレが怒りに任せて襲つてくるとも思つたか？ そんなワケが無いだろ。

「……オレの存在を消す方法の代案だよ。それくらい考へてるだろうな？」

「……怒つてないのか？」

「残念ながら怒り心頭だ。だが、オレも多少の年月は生きてきた。バケモノと崇められ、兵器として使われる毎日で覚えたのはほんの少しの我慢だ」

「……」

そんな目で見るなよ。同情なんぞ要らぬいつての……。

「今ココでお前を殺るつてのは案外簡単なんだりうそ。きゅうっとしてドカーンつてな。だけど、たとえオレが無抵抗でも逆は無理なんだろ？」

「…………。君の能力は魂に依る力だ。そのままの状態で殺せば、輪廻の輪に捕らわれて転生。その先でまた目覚めるというわけだ。君の人格と、能力そのままにね」

「そうかい。オレって自分が思つてた以上にやっかいな代物だったのね。」

「代案は 無いわけではない。一つある」

「一つは私の力を使って、この世界に封印することもんだ」

封印、か。だけどそれって……

「……意識とかあつたりするのか?」

「……多分、ある」

却下したいといひだな。退屈で死ねるし……。

何かの拍子で封印が解けないとも限らないしね。

「もう一つは?」

「もう一つは君を異世界へと転移する」

「……ほづ?」

「正直な話、私はコレをやりたくない。結局は君と向いの人々に丸投げする形だからね」

「だが、封印よりは可能性あるな」

「うむ……君はそこで自分と同等の魂を持つ存在に殺されるか、相討ちにならなければならない。神でも人でも魔物でもいい。けど、それは魂すら碎く必殺の一撃でなくてはならない」

なるほどね……勇者と死闘。神様の乾坤一擲か。

「しゃーねえ。それに賭けるしかなさそうだな……分かりやすく魔王とか勇者とかいる世界だと楽そうだな」

「言つておぐが、どの世界に飛ばされるかはランダムだ」

「本当に神様つて微妙な仕事しか出来ないのな」

「……」「めんね」

つてなんか微妙な表情して白い部屋から出ようとしゃがる。  
まさか逃げるんじや……。

「逃げはしないよ。この部屋を私の力で崩壊させる。」  
「世界から少し外れた位置にあるから……運がよければすぐどこかに拾われるはずだよ」

「ちょっと一転移つてそんな偶発的要素でやるものかよ？」

「ハ……魔法とか奇跡でなんとかしろや。」

「それじゃ……」

「待てよ神様。お前にこの後どうすんだよ。世界なんてもう再起不能なんだから付いてくるくらいのサービスはいいんじゃねーの？」

〔冗談半分期待半分で声をかけてみるが、神様は首を横に振った。残念。〕

「オーケー。今度はしっかり仕事しちよ。サボつてたら觸くれてやるよ」

「ああ、よろしく頼むよ」

「あらり……あつたりと扉を開いて出て行つちまつた。

つーか殆ど表情動かなかつたな。実はロボット……は無いか。

しばらく待つていると、ドアと壁と共に由て部屋のあちこちに亀裂が走る。

壁が剥がれ落ち、次いで床が抜け落ちていく。

待つのも面倒なのでオレは壁が剥がれ落ちて出来た大穴に身を躍らせる。

……何も無い。上も下も右も左も。星のない宇宙空間のような感じだろうか。いや、行ったこと無いけどさ。しかし、案外と快適だ。とりあえず待つてみるかな。すぐに拾われるとは言つてたけど……

…あの残念な神様が言つことだ。信じるのは程々にしておへとしきう。

オレはしばしの休息を取るため、意外と居心地の良いこの空間で居眠りすることにした。

・  
・  
・  
・  
・

神様 view

扉を閉めて深呼吸して集中する。そして、予め仕掛けであった自室の強制崩壊魔法を発動させた。

「……これで、よし」

崩壊が始まるのは大分後だ。この程度の魔法を動かす力すら全力で挑まないとかなわない事実に不満が残るが、これ以後やるべき事など残つていなければ何の問題はない。

せめて転移の成功までサポートしたかつたが　自身の世界を終わらせられないほどのこの老体では到底不可能。

「せめて後500年若ければ……いや、そんなことを言つても仕様がないか」

既に崩壊を始めていた白い廊下はかなり短くなっている。

少し歩けば端へ着く。眼下には未だに燃え盛り続ける灼熱の世界

『煉獄』とそれに体のほとんどを喰われた私の世界が見える。

決心して虚空に足を踏み出そうとするが、直前に扉へと振り返ってしまう。

「ふふ……私は、こんな未練がましい奴だったかな?」

そう、君だけが心残りだ。もしやり直せるのなら……今度こそ君を、私の手でたつた一つの未練を残して。私は『煉獄』へと墜ちていった。

## 第一話・お姫様と贅いのキス

ゆったりと闇の中で眠っていたオレを急速に引っ張る力が捕らえる。

とは言つても熟睡モードに入つていたオレを起こすにはちと弱い。土日の朝とか、布団から出る気が起きない感じだ。

地面上に足がついた感覚がしたが オレはそのまま眠り続けることにした……。

ルチア姫 view

はあ……やつぱり、自分の手でやるのは疲れますわ。

今は仕方無いから我慢して差し上げますが……本当に私自身の手でやる必要があるのかしら？ もう古い儀式法ですからね、改良する必要がありますわね。

そんなことを考えながらも私は手を止めずに儀式用の短剣を振りかぶる。

振り下ろした先には生贅の胸部。脈打ち続けるそこに勢い良く突き刺した。

儀式法の手順に則つて順番に切れ込みを入れ、骨を断ち、心臓を抉り取る。

ふむ……色、艶、魔力濃度。問題有りませんわね。

私は心臓を捧げるようを持ち部屋の中央にある魔法陣の上に置く。二十一個目の心臓 これで準備は完了ですわ。

四方の壁、床、天上に描かれた血色の魔法陣を素早くチェックして問題が無いか確認する。

流石は私。<sup>わたくし</sup>一部の隙もない美しい魔法陣

特に床の主要魔法陣は完璧な出来ですわ！

ああ……この光景を保存することが出来ればいいのに！

「ん、んっ……姫様。そろそろ」

私が自身の作った魔法陣の出来に惚れ惚れしていると後ろから声がかかる。

はあ……水を差されましたわ。少しくらい空気を読んでくださいらないと。

「分かりましたわ。これより勇者召喚の儀を執り行ないます。私が主要魔法陣を担当しますから、あなた方は補助魔法陣をよろしくお願いしますね。失敗など許されませんわよ」

「ハツ！…」「

即座に配置につく。四人の補助術者は四方の壁につくように。私は最も中央に近い円陣の中に陣どる。

「始めますわ」

言葉と同時に目を瞑つて集中。

魔力が魔法陣を満たし黒々とした光を漏らし出す。

イメージするのは広大な海。その中に沈む巨大な何かを探る。

……なかなかピンと来るものがありませんわね。

どれも似たり寄つたりな感じで　　あら？

伝わるのは他のものより少しだけ大きいその存在。

しかし、その深さは測り知ることが出来ないほど。

まるで　世界がいくつも詰め込まれているような、何とも言いたい感覚。

ふふつ……貴方に決めましたわ！　さあ、おいでませ！

それを掴み、引き上げるイメージ。

私が儀式の成功を確信すると同時に、魔法陣から溢れる黒い光が部屋中を埋め尽くした。

「お、おお……」

その声は補助術式者が漏らした声だったが、私も同じ気持だった。全てを飲み込んでしまったようなほど黒々とした漆黒の髪。

この世の一切の汚れを知らないと思われるような造形美の顔。

バランスの取れた無駄のない肉体。

さらには見たことの無い材料で造られた漆黒の服を着ている。もし神がその存在を知ったならば、手元に置いて片時も離さないとさえ思える。

そしてその存在を私が 支配出来る！

「拘束具を」

「ハ、ハツ！」

振り返らずに、差し出された拘束具 銀色の首輪を手に取る。震える手で微動だにしない彼の首に取り付ける。

ふふふ……絶対に逃がしませんわ。これで貴方は、私だけの勇者様。

私が感触を確かめるように頬を撫でていると、彼はゆっくりと目を開いた。

ルチア姫 view end

類を触る感触に目を開くと、そこは石造りの部屋のようだつた。  
うわー……なんというか『す、すごい趣味ですね』としか言えない部屋だ。

なにあれ、心臓？ まだビクンビクンしてゐんだけど。  
というかこの子はいつになつたら離れるんだろうか。

それにしても血でべつとりなのに良い笑顔ですねお嬢さん。これ

なんて獵奇的な彼女？ ヤンテレ？

しかし、それすら靈んで見えるほど美女だ。

長い金髪に赤のドレス いや、これ元は白か？ ともかく似合つてゐる。

全身血塗れじゃなければ引く手数多だらつ。血塗れでもありそつだが。

「q a w s e d r f t g y h h u j a v d f r a d ! f a v e x  
s w w l x k g a ?」

「…… o a d g g e v s c r a ?」  
…… オーケー。まあ待て、時に落ち着けオレ。も、もう一回聞いてみよ。

さつぱりわからん。まさか異文化コモニケーションからひとは…  
… 正直覚えるのが面倒だ。  
早くも挫折しそうになる。

ああ、昔ジエスチャーで帝国の将校と交渉したときを思い出した。  
あの時は本から地道に学んだっけ……。

なんて思つていたら少女が何事かをブツブツと呟ぐ。

それと同時にオレの首元が光が つて何で光るよ！？  
確かめてみると革でも鉄でもない妙な材質のチョーカーが嵌めら  
れているようだ。

何でこんなものが……。普通に考えるならこの子がつけたんだよな。

そんなことを思つていると少女がまた口を開く。

「失礼、言語能力の付」を忘れてましたわ。改めて自己紹介を、私の名前はルチア・ブライドリイですわ。貴方のお名前を聞かせてくださいましら？」

な……なんて良い子なんだ。オレが言葉を理解出来ていないので瞬時に判断して魔法を使つてくれたのか。やべえ、涙出そつ。

そうそう、名前だつたか。オーケー、オレの名は

「名はありません」

つて、ええええええええええええ！？

何故か勝手にオレの口から否定の声が出る。どうこう事これ！？なんとか声を出そうとするが、それ以後の言葉が出てこない。わたわたと怪しい動きをするオレを気にせずに少女 ルチアは語りかけてくる。

「名前が存在しないと そういうことですね？」

「ええ」

待てやオレの喉！ 勝手に決め付けるなよオラア！

「では、私が名を授けます。これ以後はその名を名乗るよ！」 よろしいですかね？」

「わかりました」

わかつてねえよ！ へつ………… ううなりやジロスチャードの異常を知らせるしかつ！

「もう……もう少し落ち着いて待つなさい。今考えておしあげますから」

なぜか直立不動とまではいかないが、自然体に体が戻される。え、もしかしてこれ操られてる？

いや、完全に乗っ取られてるってより強制力が働いてるような……。

しかも口調まで変だ。オレは「んな丁寧に受け答えするキャラ」じゃないのに……。

なんかこいつ……オレじゃない好青年がオレの声で喋つているような違和感だ。

「…………決めましたわ。貴方はこれよりクローデと名乗つなさい……」「はい。素敵な名前をありがとうございます。ルチア様」

あー…………「ん。もうここよクローデで。つてか何で様？」

「ふふっ…………良い心がけですわクローデ。わあ、誓いのキスを」

キスとなー？ これはアレか、それなんてエロゲーな展開でいきなりのマウストゥー……え？

オレの期待、もとい予想を裏切つてオレの体は勝手に膝を折る。さらに、それに合わせるようにしてルチアが片足を上げる。

ちょっと待て！ この展開は……女王様の『お舐めなさい、この犬』って感じの……？

あ、ああ！ ちょっと待つて。流石に靴にキスするのは初めて  
ていうか、心の準備がですね？

あ、あ、あ、……アツー！！！

誓いのキスは血の味しかしなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7308n/>

---

マジキチなオレが世界を救うワケが無い

2010年10月9日19時30分発行